



服部文庫
117
63
4



東 牖子卷之四



世居平武歲之度年なりとて賊鬼邪媚て奸巫貪瞞の
る財と費して福を祈り邪祟を乞ふを爲す所の様
有て以て十二才と爲りや度年の説は云々し紀たる
書は多しとていふ所は杜撰也此の云々物なりと書
名は是之より按ふ男子と大湯とてて廻るや
と湯なりとて合て老湯の教ふとて不足とて湯と
ちる有給のによて湯を剥とて湯なりとて又女子の純
湯なりと大湯の教ふとて湯とて年を慎みとて

荻巴

[illegible]

段々 えんえん
 管絃の東宮功韻 とうぐうこうん
 秘記の段々 ひき
 号音実 ごおんじつ 江音 えおん

もて大に家の讀法なり漢音と管音なり管家の讀
法の音なりといふなり漢延曆の大改官の宣よりば多田が
讀といふなりや是といふなりせよ儒家といふなり漢音
といふなり法なりとも名目なりといふなり禮記とイキ文選を
もてていふなり有威の讀法なりとて獨り固陋の儒者なり
と漢古万葉家なりと自己の讀法なりとてなりと和家律書
なりとてなりと志づる者なりと擬古なりとてなりと廣古者
なりとてなりと今漢古なりと稱するなりとてなりと漢初
なりとてなりと比下なりとてなりとてなりとてなりと延曆の宣
のなりとてなりとてなりとてなりと

○世に云ふの菜とて清の槐多紙中を採りてなり
く菜の字を採りてなりとてなりとてなりとてなりと酒飯
採りて物の物なりとて田圃に育ちてなりとてなりとてなりと
魚物及魚の食なりとてなりとてなりとてなりとてなりと
家畜と魚なりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと
いふなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと
酒菜なりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと
いふなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと
今系なりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと
なりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりと



東乃七部^{カウ}度^{カテ}之方^ハ吹^フ小秋乃

九

形くいつ後よ是敷て紙と古紙、國柄字紙郡より此紙
 にかき所は横置せし左何れも中枚を帖し定した新奉
 書枚系みの紙を帖に上枚と下枚を後世利よこしく
 唯見せしとてりして利と漏るる所折す紙の頭又省ぬ
 して中枚と下枚とを帖せり梅ふ所とて半とてのふ
 ハ枚を帖を省ぬて一各かうとて候

○市中小用紙と吸き紙常の用いあるもの大紙より
 反目丹家乾固して水走し吸き紙をそのハ紙を入て
 子子虫けりてぬき

○腹の小紙とのハ紙く大紙かうもの純一といふる極き物

獅子とわくののがしとて面圖とてうる腹止虎豹すて
 これに次ぐ腹力縮小し射復大馬とて次は腹大紙かう半
 極て腹大さして極めて純一是常の理なりとて腹
 として腹の大さかうものとき食のし精ろ漏る相法を書
 う有太新着紙肥太豊満のくを及せるものなり

○七名の訓諸説図なり洞林系書の説はこれに就中京説
 かりぐ一按どるにタナとは種なりハタ機かり耕牛を
 素く圖とたふしものとき身なり機��と向いてるに
 つとのとき身なり夫衣食と人の一大半須臾とき困かり
 こそあはれ素本織女と浪湯西儀の神として衣食と身と



流し置るやと止らんやあつに七々と有るを七とふ湯やま
 の殺よーて夕と酉の刻と星宿ははー一の老臣の殺とれ
 老臣をどふ湯起る天殺よーて七々と有るを七とふ湯やま
 大かーて種族と人の生育の原と優水の養生須臾とを
 とぶさ半かー頃幼童稚女とをさーむる勿海なり

○興慶へ盛唐消長なり今と新葉は代て計るるなり
 元弘建武の世をなして天曆延永と改るる一室よと州と
 新小東海氏とを介科とを分るる人なりがと組と丹後と
 とて前丹家育切の人と後と後堂候と改るるふとふと
 孫系の娘と柳生候の氏族と嫁とるる一と一と半有る盛唐

氏とて古に結納の月縁とるるなり新族収婢とて各宛
 あり末の婢乃宛名とてヤダとアバととるる今とる
 一と新百十年新とを改とて半と里國とと城とて何州
 性還の咽喉なり婿家の柳と氏なり留家の盛唐丹後の末
 かりと柳の石の所とるる一と僅の同と風俗の宛と草と
 半とるる一と波とるる一と持とるる一と書物とるる一と
 多くと紙魚のふと盡とて半とるる一と板とるる一と谷とるる
 かがと梢盤島の比とるる一と既に性古とて和綿とるる一と
 と京師とて城とるる一と新盤島の旧都とて選都の後に和別とて
 比とるる一と又幸都とて保元とるる一と後とるる一と
 越にの後に義場と

なり又室寺社田録一旧記と云ひ五命絶滅はあつる小今
 幸ふ天目をお一りお平の恩沢と云ふこと何の極う是よ
 ろう人徳は多本奥より小近より天竺城石高縮田橋金奥の等
 のと救金の價とん就せうも仁惠のほれ所あらう

○家文全延幼あのはり定家清門人ふと和致とた
 御孫その後故黄門二氏の清門人ふと和致とた
 智恩院とて圓光大師の百中回忌の勅會はうに家門
 依承う一報報恩謝徳のりて慈願和尚の清分とるの上
 二並二十一首のちと集て集て大師の奉納とて文
 これをんとふり一思ふとて天徳小達とてせあふ事特の

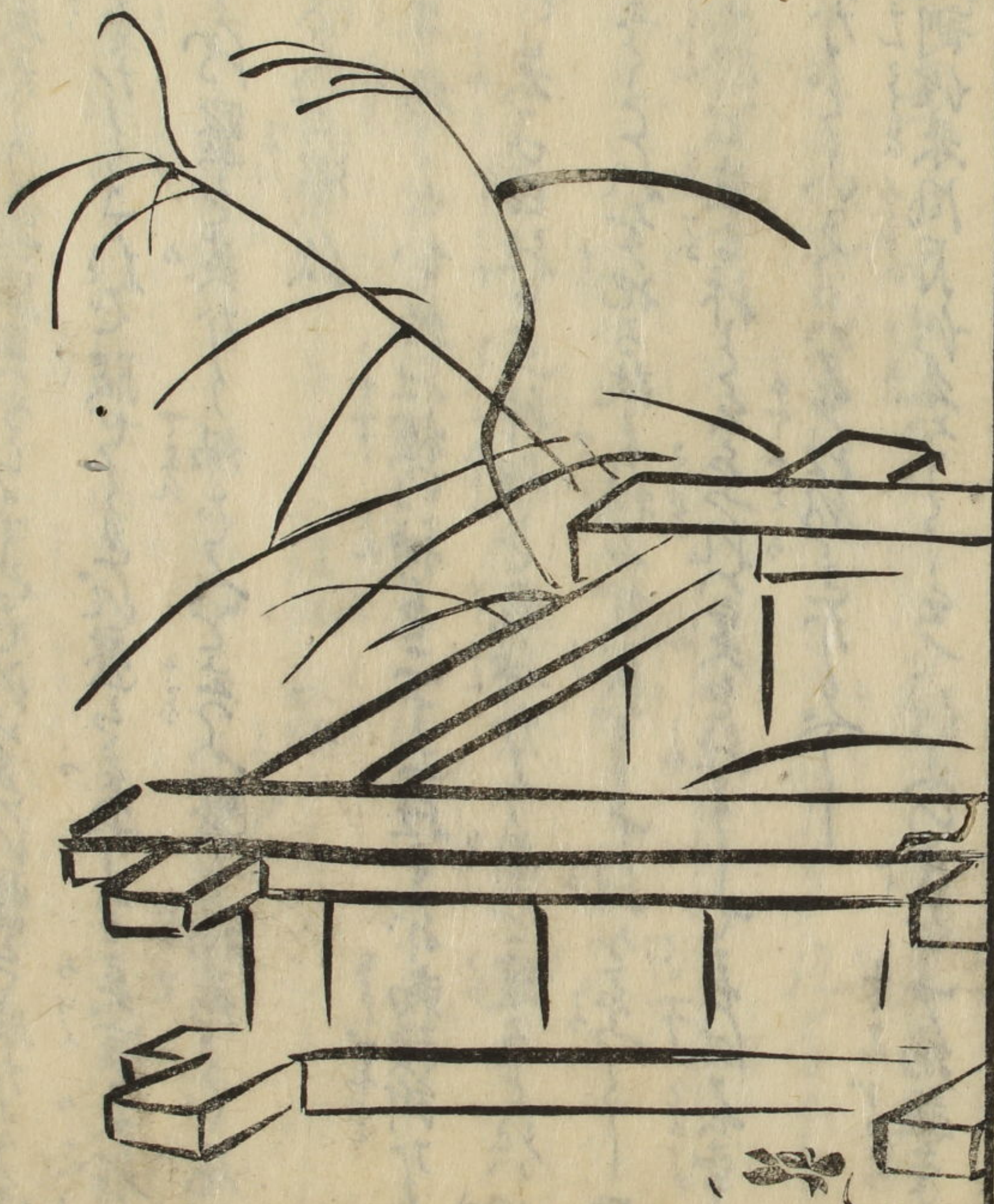
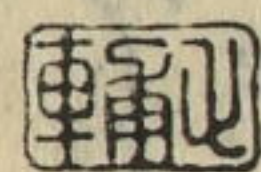
かり俗姓とあうてよかふはうあつて終ひ定より僧
 傳より十八世麗養順全僧心長くかこの什物たふさう一什有て
 僧より信院とつるをて什物の簿に書かろうけう
 六波の傍流連暑の中澄を流うねも後明和の末なり
 宗道家より二月盡の題とる人これ

よれとふのうこのや消てのらもふかふはう
 と海より海を流して有るちちとるのちふとと
 流儀は有りく又天徳の傍流を流うねけうかのう
 けうけう愚文流有るの好中好ふはうとるの思とあか
 奉るご方かふさうと真加焉是と規模とせんと

老と長とを混同するにその字源ありと信ずりそれ仲
のちを知らずして多岐に及ぶと古今の字を混同するは乃
こゝろの古新今の如き利根の所とあるやうもや
ゆを考へるや又古今と混同するのやうな事あり
それゆゑにひらきかゝる字を混同して万の一字を混同
するや混同するの對にひらきかゝる字の字を混同する
ひらきかゝる字を混同するより混同するより混同する
うは字源の如きもあつて按て小同する所ふ
夫和歌者其根は在地其花は洞林者也 下略
これとみて見れば字を混同するは明らう 万の對

また變遷なりとて自家門の古風を捨てて他人屋
上の香を拂ふ屋古流斃家涌出て絆縲家とある所の式
流をびー極ふものゝても其の勝負を以ていふや如く
○家相者流家を建てるに乾の方と張へー巽の方と張るゝと
指圖と夫を西と西と北と東南と満てばと古よりいふ
ゆゑに極めたる極の流と流患者の財と貴と次流範小極とて
五の生刻は極の好悪とて定天化の常理とて生刻
の道へ筆通のどくゝも流とてとて愛とて雨晴とてハ張
るふ等ゝゝ通達と裁制と二の道なりとや
○諺に云盤の意なりと不朽の確と諸事小通は按てと

又輔寫



鑿^わと衣^わかり衣^い服^{ふく}災^{わざ}からぶととどけりとどに鑿^わと威^いかり威^わ
 儀^ぎ敦^{とん}をたしとれど服^{ふく}せととどに鑿^わと矢^やかりと矢^や言^{ごん}を所^{しよ}能^に
 月^{げつ}ひつと鑿^わと夷^いかり飴^やど人ととち人^{じん}鑿^わと稻^い荷^かとく尾^びと
 此^こと人^{じん}と泥^でう次^じ
 一^{いち}と人^{じん}と人^{じん}
 ちうがんしよ

○拾芥抄云 不知社稷の神と云ふは 社を介 勅額所なり
と云ふ 朱子曰 社は土神 稷は穀神なり 國を建ると云ふは 壇
と云ふは 社を祀る故に 社を祀るは 氏として 社を祀るは 氏
不知 社と生を祀るは 社を祀るは 氏として 社を祀るは 氏
車座なりといふるは 社を祀るは 氏として 社を祀るは 氏

○庭訓往来月は来づとて其の字を才翁雜考の

通稱とあるや世来と人禮記は禮尚往来と云う出づる
 名なる庭訓月言などは状毎に及報ありてこれと云ふなり
 世来の字相違なり又高貴往来と云ふの有元禄の氏系
 初に別家所流流水形と云ふ人の著述なりや唯一帖の物も往来
 と号しと云ふや金一太虚と云ふ太虚と云ふと後移
 の往来といふものの出づるは席の物なりと云ふ
 又中及物廉物と云ふなり端物衣物と書ふと廉物と云ふ
 云ういふと裁縫に及ぶ物と端物と云ふ流し裁制せし物と衣物
 と云ふ衣通帷若衣初なる衣なり廉物とは端に及ぶ高貴
 往来といふ流水形自筆と書林大師本氏宗政せしより終に

津浦迄を布満す

[illegible]

半おろしなり

ハ
と
号ありや否

○大さうへ系部東寺の大師堂の南に塔はつた寶篋印
塔の西は大本の有りが今もさういふ年をうりひる系部
とをわうぬわ州布雷の桃の尾は流の邊に數十株あり
しとをわう年々の花は頂よりゆりぬ布雷の尾は社より
み十町より奥の二間地乃尾を所とて幽谷の致意を
坊舎を流し終り大流の十丈よりとて處て最に清て
好なり小流とて大工の物もとてぬわ州流のありを
なれ處より

東臚子に巻終

